

# 環境危機問題への市民行動の在り方、雑感

241110to

## 1. はじめに

### 1.1 目的

近年、地球規模では気候変動による危機（高温、降雨、干ばつ、他）、広域規模では都市環境改変（大規模再開発、街壊し、他）、ゴミ放置（放射能、プラ他）等といった環境危機が叫ばれている。こうした環境危機はこれまでの（人間の）生産活動における諸矛盾の急激な噴出の結果とみられており、危機回避・解消には、過去の生産活動の見直しをも含めて、すべからくこぞって対処が迫られている。これには三種の対処がある。第一は即対応として、危機の防止・軽減や回復・復元・復興であり、第二は抜本的社会対応として（技術による）国土強靱化であり、第三は「社会の基礎体力で跳ね返す」という社会の健全化（社会システム改善）である。

本稿では、上記の第三の対応に組して社会健全化を市民流になすために、市民側からの対処の方法について構想を練ることにした。そこでは、市民の知的・感性的な土壌の醸成とそこから沸き上がる市民行動の在り方について考察し、これをもって社会の基礎体力の市民流形成とした。具体的には、市民行動への下準備づくりとして、危機の全貌や状況の把握、原因とメカ把握のための知性感性の土壌づくり、と危機回避・解消の展望基礎プランづくりを考える。

### 1.2 問題の所在、アプローチ

(1)問題の所在；著者が言うまでもなく以前からよく指摘されているように、研究者や行政の先行的対応もさることながら、問題への市民のコミットをどう図るかが問われている。確かに、研究や実務による成果が市民にどう反映されているか、いまだに大きな問題となっている。

(2)アプローチ；諸問題の全貌を展望という形で市民視点で明確化を図りたい。まずは、危機対応の前段階の準備を市民視点で構成する。これには以下の二種あり。

a.市民の感性を重視；感性からの思考・行動

b.諸事象の問題構成の明確化を上記項目をも含め社会健全化として考究。これには諸問題の共通する根源（根っこ）からの問題の構造を探るとともに、市民の潜在的ポテンシャル向上を図り、市民運動へ持っていく。

上記二方法で、市民視点で人間・社会の論理作成し、

市民・技術の枠組みにより建築系中心に論究する。

(3)参考；目標に向けた展望を構想する。

ステージ 1 危機の現状対処として、原因、対応、将来予測

ステージ 2 危機回避・解消に向け構想と計画

（展望基礎プラン）、そして施策・政策

ステージ 3 実施に向け実践実働→政策実働、市民運動、企業参加、他

### 1.3 諸問題論点構成

社会健全化に向け解決すべき主な諸問題を列挙する。

#### (1)今日的脚光の問題

成長路線、人口減少、格差社会、AI 問題、大規模再開発問題、（今なお続く）公害問題、他

#### (2)社会システム問題

経済体制、効率至上、過度競争、他

#### (3)社会ムードに染まる人間側

同質化、思考停止傾向、無批判傾向、順応是認、限定される個性と創造性、格差容認傾向、競争是認、他

#### (4)学術側には 節 4.1(1)に再掲

- ・実践よりも理論重視、情熱よりもエビデンス志向
- ・大事なことをも切落とすモデル化、顔の見えぬ客観論
- ・工学はバズつくすその前提条件そのものの無議論、

## 2. 市民の思考・行動考

### 2.1 感性と知性

(1)市民と専門家；市民の素養を専門家と比すと；

・市民；感性はより広がった対象について深みを増す。理詰めよりも自らの納得が要。

・専門家；理論的により深く思考。組織の論理からの思考行動多し。

(2)市民の知性・感性の土壌；感性が何事にも先行し、認識は感性的といえよう。このため、知性については感性先行となり、しかも次のような特性ありと考える。

・（個々の）各種知識の細く緩やかな繋がり。深堀ものでなく広がりもの。網羅・包括ではなく、統合・総合でもなく。

・組織の論理に縛られない発想も可のことあり。

例；親子遊びでは周辺の論理環境が姿をひそめる。

(3)思考行動、補足；こうした論理を市民側で組み立て

実践することが市民側の特徴である。なお表現「個々」とは個人とか個別のことといった総称で使用とする。

## 2.2 感性からの行動

(1)行動の源；行動の源とは、感性からの衝動や情熱にあり。これが、欲望、意欲、情熱、理念理想、打算、メソッド、他となって現れると考える。

(2)感性からの行動；感性の発揮程度に応じて、行動も様々な様相となる。

- ・感性の鈍化；ややもすると例えば商業モードにのせられざみとなるならば、感性の発揮が霞む。

- ・生活向上への欲望喚起；生活の安定・豊かさ・充実を求めたいいわゆる安定志向。ただしこの場合でも環境変化はマインドに映る

- ・理念的情熱；情熱的欲求の喚起で執念的行動へ。

- ・種々入り交り；場合場合で程度の差を伴っての行動。無償の行動あれば有償の行動もあり。

(3)社会にも目を向けて

特に、社会問題、経済問題、格差問題、同質化問題

(4)専門家とともに協奏

専門家は市民のパートナーであり、市民に寄り添う。

## 3. 行動の実施に向けて

### 3.1 市民側の土壌

市民の特性が反映するバックグラウンドの一つに感性・知性の土壌(単に土壌とも称す。市民の拠り所となる大地のイメージ)を据える。この観点で、土壌から行動(市民行動)への推移をみよう。

(1)知性・感性土壌の醸成；日常生活の営みが結果的に土壌づくりに寄与している。これが順次積み重ねて大きな力となる。

(2)感性からの諸能力；感覚の研ぎ澄ましとして、子ども期の遊びが基礎となり感性が積み上げられ実践でもまれていき、想像、予知、推察、観察、他が形成される。

(3)知性の姿；知性は個々の断片的な知識であっても繋がりながら集積したものとなる。また繋がりとは、例えるなら横に広がる触手と上下に伸びる触手の二元ものである。これには、広範囲な俯瞰が働くと考える。後に出てくるが、展望基礎プラットフォームはそうした機能を活性化するためのものである。

(4)知性の研ぎ澄まし；知識の吸収や知性の研ぎ澄ましは、日常の自由闊達な語り合いや共通の目的を持った集いの場合でもモデレーターやファシリテーターをおかずに(歓談誘導を廃して)自由な語り合いによってなされると考える。

(5)市民行動へ；市民の土壌が醸成することにより、市民行動(活動や運動)に向けて市民が力をつけて即行動として市民運動が沸き上がる。この勢いが組織運動や個々の運動にも広がっていくことになろう。

組織運動については、行政主導や、市民行動派主導であれ、市民の結集が図られる。また、最近はやりの市民会議は、かつてのリベラルな住民運動とは全く違って、行政主導で専門家も支援する市民教育を兼ねた運動であり、参加する市民は無作為抽出により選出され、およそ市民のためとは言いがたい。これに対して、草の根的運動や個々に進める運動もある。

### 3.2 コミュニケーションのコミュニティ

節3.1(4)で多少触れたが、自由な語り合いの場が市民の間ではコミュニケーションのコミュニティと位置付けられ、市民土壌の形成に欠かせない。これに関する場としては、全国各地に、朝活、ゆったりカフェ、憲法カフェ、哲学カフェ、歴史カフェ、他がといったコミュニティがあり、何処も華盛りである。なお、専門的テーマの研究会でも、自由闊達を保持して市民のコミュニティも結構あり、カフェ文化が市民の知性のオアシスとなっている。

以下に、コミュニティの様相等を述べる。

(1)様相；語り合いのチャンスと場における自由な語り合いを目的。

- ・テーマ；社会問題のなかからいくつか取り上げて設定があるが、設定なしの場合もある。

- ・参加者；一般市民。内容を特化したカフェにおける専門テーマの場合でも一般市民が参加し、自由に語り合い。

- ・進行；勉強会の様相であっても語り合いを通して、進行は一方向にあらず。フェードアウトは不要。

(2)種類；専門に特化しないで2種類がある。

- ・一般市民の語り合いの場；しゃべり場、朝活、他

- ・専門に特化でも市民の集う場；憲法カフェ、哲学カフェ、歴史カフェ、他

(3)効用

- ・断片的知識が各自の中でつながって知のストックに

- ・自らの発信や他者の受信の貴重な場

### 3.3 コミュニケーションのコミュニティ(続)

コミュニケーションのコミュニティは話し合い・語り合いが成立する人的環境を意味しており、街の中でそうした空間があればコミュニティと位置付けている。このように考えれば、家庭や職場においてもコミュニティというものを設定できる。すなわち、街のコミュニティとして井戸端の場はもちろんのこと、家庭では囲炉裏の場(団欒の場)であり、職場で

は余談・雑談・歓談の場を意味している。こうした場におけるコミュニケーションの沸き上がりを包み込むモノが、街・地域における(節 3.2 で示した)個々のコミュニティである。

## 4. 市民系の思考総体

### 4.1 思考

章2で述べた市民側の感性からの思考・行動の背景をなす思考体系(ロジック)をひとくくりにして概念化するとともに市民にはなじみやすいと考える。ここではこれらを市民哲学・市民社会学と称することにする。

まず市民哲学についてはかつての時代が提唱されており、最近では街づくりのバックボーンと呼ばれもしている。次に市民社会学については、文化人類学とか市民社会の政治や文化など、割合細分化されている感がある。哲学のようなまたまた扱いは少ないといえるが、市民哲学と同様の位置付けで市民社会学があるとす。市民哲学と社会学でもって、ここでいう市民からの思考総体の概念としたい。以下に論ずる。

(1)知性や知識の感性を主とした様相。専門家の域にも若干踏み込み

- ・知性を繋がりある集積

  - その結果、繋がりが知識の集積

- ・理論よりも実践重視、エビデンスよりも情熱先行

- ・明確な体系よりも、

  - トの先行の感性と知性の混合の集り

  - (・効率を重視しないモデル化、繋がり思考でモデル化)

  - (・ベストをつくす工学の前提条件をも議論)

(2)思考も関連性の上に個々も重視

- ・俯瞰と深堀とその中間域の三構成。

例；浮き草。水面は基盤、深さ方向の根、上空に草茎

- ・各体系。個々大事に、かつ連携や総合・統合も自在へんげ

(3)その他

- ・思考総体としても明確体系はない。あるのはトの総体、個々に自在へんげ

### 4.2 哲学や社会学の今

(1)市民哲学の出番；経済優先社会ゆえに人間性復権を目指して哲学待望論がある。にもかかわらず、哲学関係者の間では、哲学は死んだという。これは、哲学では今日的対応が困難ということの意味である。事実、今は、哲学が倫理学にとって代われ、倫理の方がこの世に合うのであろうか、学術団体はいうまでもなく、各団体には倫理規定が備わっている。しかしながら、倫理は哲学の一部である故か、哲学的な議論、例えば

理念理想の論議は全くないにちかい。そんな今だからこそ、感性からの市民哲学の出番ありといえる。

(2)市民社会学の出番；数理のテクノロジー導入により、人間社会における各種の問題について、人間性のデータ化により事象の解明や社会のコントロールを目指すことまで可能となってきた。確かに、諸事象について迅速的・合理的な処理により分析や予測には利用価値が高い。そのためか、人間と社会の思考行動的な論議が霞んできているように見え、今はテクノロジー社会学というべきものももてはやされている。それだけでいいのであろうか。ここにも、多種多様な意見や見方が社会学の基礎。感性からの市民社会学の出番ありといえる。

(3)社会系から見た工学系；

工学においては社会系・人文系を軽視しがちである。なぜか。社会系専門家は社会系に明るくても工学系を(非専門の格下の)市民とする。逆に、工学系では社会系は何も生み出さない格下存在にしばしば見がちである。今は、工学を社会系や人文系と連携しようとの動きもあるにもかかわらず、両者の相互尊重は未だに低いと言わざるを得ない。もちろん、改善が必要である。

## 5. 危機への対処としての運動

### 5.1 運動とその方向

危機回避・解消に向けた運動について、その様相や運動目標の面から述べる。

(1)運動の様相；危機回避解消に向けての市民主導の考えを個々から始まる社会への運動と捉える。

(2)運動の向かう先；

- ・社会の根源的な問題；脱成長については別途考える。SDGsには持続可能と発展の旗印のうち、発展を緑確実に変えたい。

- ・社会諸矛盾；公害、原発事故、改悪環境、歪教育、他  
→非人間的となる組織論理の再考をめざす

- ・率先活動；社会雰囲気向上、環境向上、  
恣意的トの撤廃

- ・緑保護；動植物保護、森の保護、農の自然栽培

(3)個人での対応；衣食住で工夫を凝らす(過度な文明に頼らず)。この他、やや超人的生活もままあり。脱電力・非電力での生活もあり。

(4)学術；専門家による英知の結集が市民に伝わるように。市民とともに、技術(を動かす側の)暴走をとめ、危機回避計画策定、人間復権、他を考えたい。

### 5.2 運動の形態

運動の形態は三種あり。本稿では項 c の様相を念頭

に置いて運動の着手としたい。

**a.社会全体運動**；・大掛かりな社会改変は民主主義運動として；産業界はみずから変わるのであろうか。社会システムをそのままにしては無理というもの。社会にて市民側から民主主義を雰囲気や拡散浸透させることになるのであろう。

・教育については、文科省の教育行政の刷新が要。教育行政そのものは政治が変われば変わるもの。政治を変えなくて、教育現場に政治教育も入れてといっても、システムが変わらないと何も変わらない。

**b.問題別市民運動**；各種問題をはねのける；個々の社会歪みの先には、公害、原発事故、環境改変、等があり、環境改善の大運動・闘争がある。

**c.広範市民活動**；項目 b,c も念頭に置いて人間性に直に訴える。市民が保有する知性の土壌を市民による社会意識として充実させ、これをもって、社会推進派のつくるムードの打破を図り、市民側のムード拘束を払いのける。ただし、この運動は、生活の営みの延長により、市民意識を積み上げる活動そのものである。

## 6. 社会の健全化、ごく自然体で

環境危機問題に向けてのひとつの取り組みとして、「自然体での市民生活ありき」、「市民生活の営みの延長に都市や社会がある」の考えをもとに論を展開する。

### (1) 市民と組織・社会

・市民社会の土壌には

市民生活の営みによる体験と積み重ねがある。

生活の営み→延長→街、地域、都市、社会  
積み重ねには、

延長先の社会や組織にむけ市民側から積み重ね

・組織側には

組織活動遂行や組織維持のための組織論理あり

・組織や社会の変革には

市民の街の小規模レベルには、

外界からの圧力よりも内在のパワーが旺盛

組織や社会に向けて生活営みから積み上げ

これを社会の健全化としたい

### (2) 積み上げるもの

・皆で何処でも日常にて体験を重ねつくりこむ感性

感性が知性にも転化し、慣習や論理に、

そして組織論にも

### (3) 変革

変革について、日常的に、あるがままに、足元から、沸き上がるパワーに大いに期待したい。また、岩見先生の「小さな世界から大きな世界へ」の論にも応えたい。

今、かかる取り組みについて、全国各地で動きが活発化している。いくつか列挙する。

・街づくり；市民のあるがままにで構成

・気づきや学び、いい体験の積み重ね；

子ども期での小規模で自由な学校、夢見る学校

校則なし、通信簿無し、職員室無し、子ども中心

あるがままの場での体験積み重ね

・コミュニケーションのコミュニティ

街の中でコミュニケーションが往来する自由闊達な場

各家庭や小さな職場のコミュニティを支えながら

### (4) 気候変動災害にむけ；

国際的にも改善がなかなか進まない。人類絶滅危機を訴える星野先生いわく「身の回りからの取り組みを先行させて」。一見悠長な本アプローチがそれに応えられるかどうかは今後次第である。

## 7. おわりに

環境危機に対し「ではどうするか」を問題の即対処とは別に、市民側の活力からの対処の方法もあるとして、市民視点に基づく市民の思考・行動のバックグラウンドづくりについて検討した。議論の内容を以下にまとめる。

(1)市民と専門家の枠組みでは、市民の思考・行動は感性から。知性も感性先行で捉える。

(2)市民の感性の磨きは日常生活の営みの積み重ねにあり。

(3) 知性は知の関連づけによる集積により育まれる。

(4)市民自ら知性・感性のバックグラウンド(土壌)を醸成。

よりパワーが増した時点で市民運動へと展開されよう。行政や大規模市民団体との合流や個々の超密な運動へ発展。

(5)市民側からの思考・行動は市民越額・市民社会学で結実。

▲補足；本稿は、環境危機に対し研究が進んでいるものの、市民側にはなかなか伝わりにくい「現状にどう対処するのか」から考えを進行させてまとめたものである。またまだ、雑感の域にあるが、今後は、社会の捉え方、専門家との協奏、に加えて具体的諸問題における社会的根源論について論究を準備している。

▲謝辞；本稿は何かにつけ今を憂い、将来を憂う方々との日頃の対話をもとに構成されている。関係各位には記して謝意を表す。

## A. 付録

付録では本論の議論を継続させるために設けた。対象は、

教育、市民、社会変革など、エッセイ風に述べる。

#### A1 啓発や教育；

社会変革を念頭に置いて、市民が力をつける教育はあまり見当たらない。理由は目標が抽象過ぎて、それこそ哲学論理となれば当然敬遠され気味となる。ではそうした教育は全くないのかと言えば、目標をかなりわかりやすくした教育は確かに華盛りであり、一つは社会をより良くすることを念頭に置いた市民の環境づくりに関する教育であり、今一つは市民の能力開発の教育である。ともに市民を対象としているものの目標が全く違っている。すなわち、後者はいわゆる市民のスキルアップであり、時代にマッチする能力をいち早く身に付け、仕事に活用することになる。これに対し、前者は、賢く生活しようという街づくり運動に伴った教育であり、生活を守るための教育である。

どちらにしても、市民のための教育といえるが、本題の教育ではないことも事実である。なぜなのか。先にも理由を述べたが、本稿の考えは本来的には哲学的思考の範疇に入ることになるからであろう。それでもどうするのか。そうした教育はむしろ教え育てる面が強くて、そもそも人間性を伸ばすことにはならないからであろう。ならば、それこそ市民視点で「気づきと学び」という原点に戻れば、それこそ生活の営みの次元から苦も無く原点復帰ができるかと考える。これを見無視して、啓発・教育をといっても、得体のしれぬ誘導路に沿った上でのものでしかないといえる。

**A2 教育；** ここで民の間での教育に着目する。社会変革には意識よりもまずは社会の豊かさを求め、自身でも稼ぐことが第一とする風潮がある。そんな即物的キャッチフレーズで、ビジネスを念頭においた訓練が花盛りである。このためか、意識改革の言葉すら、自己啓発という言葉にとってかわられている感がある。

ではなぜそうなのか。社会で生き残り活躍するには哲学なんて不要と同じ理屈の意識だけで飯がくえないという現実思考があるためである。よって、社会変革を進めるとあらば、仕事のスピードアップや換金性強化ではなく、しいて言えば仕事の遂行の理屈となる社会システムを変えることを考えるべきである。

#### A3 社会変革；

「社会システムを変えるんだ。脱成長を目指すんだ。」そうありたい、の声があるにもかかわらず、「どうやって」の段になると、専門家はさらに考えるんだと頑張るが、市民側では「うーん」と考え込んでしまいがちと思う。もちろん、社会が代わって欲しいと思うのは社会を生きる市民の切実な想いだから、(社会変革の文化も含め)専門家なら専門分野の健全化をめざ

すことも社会健全化とえられるし、市民の応援をいただきたいし、といったところであるので、その意味でも市民の存在は大きいと考える。

#### A4 発想の土壌

良く歴史は権力者中心とかいうように、市民側から権力側が見えても、その逆は見えない。企業や団体でも出世により上層部に登れば、上から下へはほとんど見えないともよく言われる。さらに言えば、田舎から都会は見えても、都会から田舎は何も見えない、といったことである。これらの事例は極論であり、実際には二分の構造であっても互いにコミュニケーションが程度の差こそあれ図られているという。

そうかどうかは疑わしいところもあるが、それはさておき、今一つ大事なことを論じたい。それは、社会の二部構成について、各部分は互いに対立ではないので、そこにコミュニケーションがあればそれで十分、のようにも見えるが、組織内でのコミュニケーションは組織内でのモノであり、全人格的、人間的なものを求めるものではない。今必要なのは、枠外思考で、そうした人格的な次元まで広げれば、いろんな意味で各部分がいろいろの接点を持って繋がり、それこそ、新たな統合体や複合体ができて、そこには各個人がそのままの状態で存在していることである。これなくして、二部の連携や繋がりにはあり得ないと考える。たとえば、都市と田舎。単にコミュでなく、他との交流があっても、組織論理を越えない限り、相互尊重はあり得ない。一方が他方の補完ではないのである。

#### A5 なぜ市民か；

なぜ市民か；世の中には、市民への注目が結構ある。自主・自律、批判精神、個性、創造性、等がある一方では、自己責任、協調・協力、バランス、など自己の周りに対して自己を抑制するかのような、要求もある。これらはどちらについても、これらは社会の一定の基準の中で動くことを良しとする雰囲気や前提としている。本来の上記のキーワードは両方の側に都合に合わせて設定されることもある。例えば、個性とか独創性は、市民世界では自由にとことんということになっても、企業においては企業活動の範囲内で成立するものである。

このようにみると、市民レベルとは何の拘束もない自由な状況にあるといえる。しかし、そうとばかりも言えず、商業モードや購買意欲促進のモードという新たなモードが人心を動かすという力の存在がまことしやかに流れている。とはいえ、市民レベルに降り立って考えるなら、そうしたモードを排除してといっても排除できないゆえにそうしたモードの中でも、まやかしモードに影響されない意識として市民意識を作っていくことになる。苦労は予想されるが、そうした所から、自由論議が始まるのであるといえる。